

〔調査報告〕

スポーツクラブ所属経験の有無からみた 女子学生のスポーツ参与の相違

新 谷 崇 一

はしがき

生涯スポーツが叫ばれるようになってから久しい今日、その生涯スポーツも国民の生活の中に少しずつ浸透してきているのがうかがえる。しかもその浸透は従来の学校を中心とした、勝利第一主義にみられる「精神論、根性論」的クラブ活動というより、スポーツ本来の「楽しさ」を求めたものへと変化してきているようである。

それは、地域を基盤とし、楽しさを追求するようになってきたスポーツ少年団に、また全てが整備された大遊戯場において瞬時の楽しさ、解放感を味わう都会派的スポーツなどにみられる。

また、「スポーツは若者文化であり、日本のスポーツは学生文化でもある⁽¹⁾」といわれながら、日本のスポーツ界を背負ってきた学生は、現代ではレジャーランドと化した大学で青春を謳歌しながら、多様化した価値観の中で様々なスポーツに親しんでいるのが現状である。

中学、高校とスポーツクラブ（以下、スポーツクラブとはそのタイプを特定しない限り、体育会系や同好会、スポーツスクールなど全てを含んだものを意味する）に所属してスポーツを行ってきた学生が、大学入学と同時にスポーツから離れたり、また厳しい練習を強いられる体育会系のスポーツクラブから、拘束されない解放的なスポーツ同好会へ加入したり、あるいは一人でアスレチックジムへ通ったり、逆にスポーツとは全く縁のなかった学生がスポーツ同好会に加入したり、体育会系のスポーツクラブのマネージャーになったりと、スポーツに対する価値観や、スポーツへの参与形態が複雑化あるいは多様化してきている。

しかし、スポーツに対する価値観や参与形態が多様化してきているとはいえ、過去におけるスポーツ経験で養われたスポーツ観等は、現在のある

いは将来のスポーツ参与に多大な影響を与えるものと考えられる。特に中学、高校と一貫してスポーツクラブに所属しながらスポーツに携わってきた学生と、中学、高校とスポーツクラブに所属せず、スポーツ経験の乏しい学生とのスポーツ参与には大きな隔たりがあるものと考えられる。

本調査報告は、中学、高校と6年間スポーツクラブに所属した女子学生（以下、「所属者」と呼ぶ）と、中学、高校の6年間全くスポーツクラブに所属しなかった女子学生（以下、「無所属者」と呼ぶ）の現在あるいは将来のスポーツ参与の相違を明示するとともに、女性の生涯スポーツの確立に向けての資料を提供することに目的がある。

また、ここでいう「スポーツ参与(Sport involvement)」とは、「スポーツ参加(Sport participation)」という言葉より広い意味で使用されるものであり、その概念の中には行動のレベルの意味以外に、スポーツに対する意識・価値観などの意味も含まれる。いわゆる「スポーツの意識と行動」を全体的に把握しようとするものである。⁽²⁾

尚、本調査報告は平成2年度の文部省科学研究費補助金研究による「女性の生涯スポーツに関する調査—高校生、短大生、大学生を対象として—」の女子大学生のみを対象にした資料に基づくものである。

対象者の調査地区及び大学での所属系は表-1の通りである。また、スポーツクラブ所属者、無

表-1 対象地区、所属系

(%)

| | | | | | |
|--------------|-------------------------|-----------|-------------|-----------|---------|
| 対 象 地 区 | 関 東 地 区 | | 東 北 地 区 | | 計 |
| | 東京都、千葉市 つくば市、飯能市 計7校 | | 仙台市、福島市 計5校 | | 12校 |
| | 610 (64.8) | | 331 (35.2) | | 941 |
| 大 学 所 属 系 | 文 系 | 理 系 | 教育系 | 体育専門 | その他 |
| | 330(35.1) | 222(23.6) | 205(21.8) | 161(17.1) | 23(2.4) |

表-2 スポーツクラブ所属状況 N=941 (%)

| | 中学 | 高校 | 中学・高校 を通して | 大学 | 中・高・大学 を通して |
|-------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|
| 所属 | 569 (60.5) | 364 (38.7) | 312 (33.2) | 535 (56.9) | 239 (25.4) |
| 一時的所属 | 115 (12.2) | 143 (15.2) | | | |
| 無所属 | 249 (26.5) | 416 (44.2) | 183 (19.4) | 393 (41.8) | 123 (13.1) |
| 不明 | 8 (0.9) | 18 (1.9) | | 13 (1.4) | |

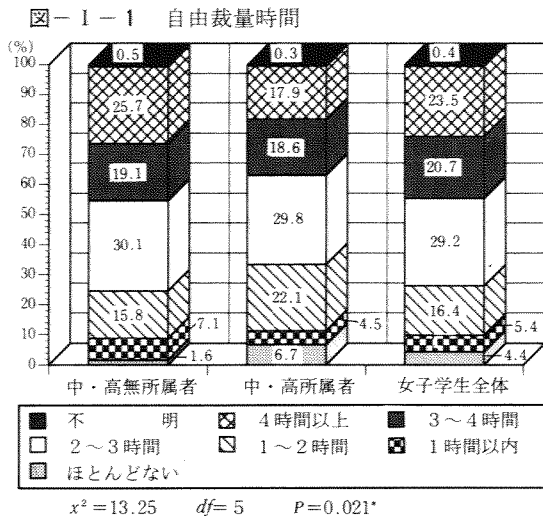
所属者は表-2の通り、全体で941名、そのうち中学、高校6年間スポーツクラブに所属していた女子学生は312名、一度も所属したことのない女子学生は183名である。

比較考察にあたっては、女子学生全体(941名)の傾向をみながら、所属者と無所属者とではどの程度の相違がみられるかを、カイ自乗検定に基づきながら進めていくことにする。

I. 女子学生の自由裁量時間とその主な過ごし方

1. 1日の自由裁量時間

勉強やクラブ活動を除いた女子学生の1日の自由裁量時間は図I-1の通りで、女子学生全体で



は「2~3時間」の29.2%が一番多く、次いで「4時間以上」の23.5%である。NHKの調査によると、大学生の平日の自由時間は「4時間41分」であり(また、19~22才の有職者の平日の自由時

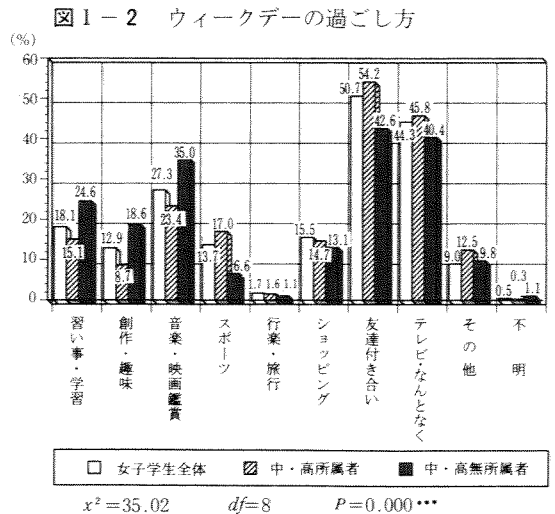
間は「3時間47分」で約1時間少ない⁽³⁾、対象の女子学生の方が若干少ない自由裁量時間であるといえる。

所属者と無所属者との比較では、 $P=0.021^*$ で有意差がみられ、無所属者に比べ所属者の自由裁量時間が少ない。特に「ほとんどない」を含めた「1~2時間」以下では3人に1人の割合となり、女子学生全体と比較しても所属者の自由裁量時間は少なく、日常生活における行動の多面性がうかがえる。

2. 自由裁量時間の主な過ごし方

それでは、その自由裁量時間を女子学生は主にもどのような過ごし方をしているのであろうか。ここでは運動、スポーツを除いた主な過ごし方をウィークデー(月~金)とウィークエンド(土、日、祭日)に分けてみたい。

まず、ウィークデーの主な過ごし方を示したものが図I-2である。女子学生全体をみると、「友

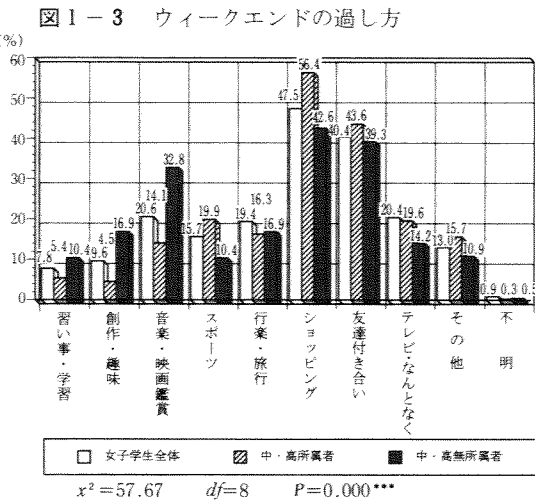


達さ合い(話したり、お茶を飲んだりなど)」が50.7%で第1位、次いで「テレビなどを見ながらなんとなく過ごす」の44.3%、「音楽鑑賞や映画鑑賞」の27.3%、「習い事(おけいこ事)や学習活動(読書など)」の18.1%となる。

所属者、無所属者の比較においては $P=0.000^{***}$ で有意差がみられるが、両者とも女子学生全体と

同様な傾向を示している。しかし、「テレビ、なんとなく」は両者とも同様な割合であるが、「友達付き合い」は所属者が、「音楽、映画観賞」、「習い事、学習活動」、「創作、趣味（手芸、絵画、料理など）」などは無所属者が高い割合を示し、所属者の行動型、無所属者の文化・教養型の過ごし方の傾向が顕著にみられる。

次に、ウィークエンドの主な過ごし方を示したものが図 I-3 である。女子学生全体をみると、第



1位が「ショッピング（ウィンドーショッピング）」の47.5%、次いで「友達付き合い」の40.4%、「音楽、映画観賞」の20.6%、「テレビ、なんとなく」の20.4%「行楽、旅行、ドライブ」の19.4%の順となる。

所属者、無所属者の比較においては $P = 0.000^{***}$ で有意差がみられるが、ウィークデーと同様両者とも女子学生全体と同様な傾向を示している。しかし、主な過ごし方のうち「ショッピング」において所属者は56.4%、無所属者は42.6%、「音楽、映画観賞」において所属者は14.1%、無所属者は32.8%と差がみられ、ウィークデーにおける過ごし方の相違がウィークエンドにおいては行動型と文化・教養型に顕著に分かれ、日常生活のパターンにそれぞれの特徴をみることができる。

この自由裁量時間の主な過ごし方をウィークデーとウィークエンドに分けて、その特徴をみると「友達付き合い」は両方において高い割合を示す

が、ウィークデーにおいては「テレビ、なんとなく」や「音楽、映画観賞」といった休息型、文化・教養型の過ごし方であり、ウィークエンドはウィークデーに比べ「テレビ、なんとなく」が減少し、「ショッピング」や「行楽、旅行」が高い割合を示し、行動型の過ごし方となってくるのがわかる。

II. 女子学生のスポーツ活動

1. 日常におけるスポーツ活動

女子学生における自由裁量時間の主な過ごし方の資料（図 I-2, 3）に基づいて、日常における「運動、スポーツ（体を動かすこと全般）」の実施状況を試みることにする。

自由裁量時間の主な過ごし方の質問には「勉強やクラブ活動などを除いた時間」という条件がついている。このクラブ活動には文化系、運動系のそれぞれのクラブが含まれる。従って、自由裁量時間の主な過ごし方の「運動、スポーツ」には体育会系や同好会、スポーツスクールなどでのスポーツ活動は含まれないことになる。

まず、ウィークデーにおける「運動、スポーツ」は図 I-2 の通り、女子学生全体では13.7%で、6番目の過ごし方である。しかし、所属者においては「音楽、映画観賞」に次いで4番目となり、日常生活においてかなり高いウェイトを占めていることがわかる。無所属者においては6.6%で、8番目の過ごし方であり、日常生活においてスポーツの占める割合に顕著な差がみられる。

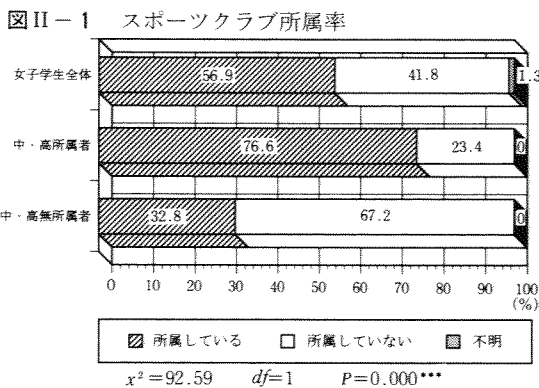
次に、ウィークエンドにおいては図 I-3 の通りであるが、ウィークデーに比べ「運動、スポーツ」での過ごし方は幾分増加し、女子学生全体で15.7%となる。所属者は19.9%で、主な過ごし方のうちで3番目となり、「運動、スポーツ」が日常生活の中でかなりのウェイトを占めていることがうかがえる。また、無所属者は10.4%と主な過ごし方としては低い割合であるが、ウィークデーに比べて約4ポイント上昇し、少しずつスポーツに接する機会を持っていることがわかる。

NHKの調査によると、大学生の「レジャー活動」の中における「スポーツ」の実施時間は、1980

年の平日は4分で、1990年には13分に、同様に日曜日では7分から14分に増加している⁽⁴⁾。所属者、無所属者間における過去のスポーツ経験の有無は日常生活におけるスポーツ活動に顕著な差をもたらすが、大学生の日常生活の中にスポーツが僅かであるが着実に浸透してきていることがわかる。

2. スポーツクラブ所属の継続性

スポーツの具体的な活動方法として、スポーツクラブに所属して活動することを挙げるができる。図II-1は現在スポーツクラブに所属してい



るか否かを示したものである。女子学生全体では56.9%と半数以上が所属している⁽⁵⁾。そのスポーツクラブのタイプは「学校の運動部（体育会系）」が37.8%、「同好会、サークル」が55.9%、またそのスポーツクラブへの参加姿勢は76.0%が積極的であり⁽⁶⁾、スポーツクラブでの活動は現代の女子学生の日常生活においてかなり積極的に取り組んでいる部分を占めていることがうかがえる。

現在のスポーツクラブへの所属の割合を所属者と無所属者との比較からみると $P=0.000^{***}$ で有意差がみられ、所属者は無所属者に比べて2倍以上の76.6%の女子学生がスポーツクラブに所属している。過去におけるスポーツクラブ所属経験によるスポーツ経験は、現在のスポーツの参与形態にもかなり影響していると考えられる。

しかし、無所属者の32.8%が、大学に入学してからスポーツクラブに所属してスポーツ活動を行っている。このことは、中学、高校とスポーツクラブに所属したくても様々な条件で所属できな

ったその条件が解消されたことによるのか、またスポーツに対する価値観に変化がみられたためによるものか、スポーツの普及、浸透のためにもその回答が待たれるところである。

スポーツクラブに現在所属しているということもスポーツの継続性という視点からみると表-2の通りになる。中学、高校における所属者の割合は中学から高校になるに従って減少し、逆に無所属者は多くなり、そして大学生になって所属者はまた多くなる。この高校期における減少は大学入学のための受験勉強を強いられるために起こる現象と考えられる。

表-2によると、中学、高校を通してスポーツクラブに所属していた女子学生は33.2%、所属していなかった女子学生は19.4%、また中学、高校大学と一貫してスポーツクラブに所属している女子学生は25.4%（注5でも述べたように、対象者の中に「体育専門の女子学生」が含まれているために幾分高い割合になっているものと考えられる）、所属していない女子学生は13.1%である。これを、1977年に江刺正吾が調査した「学生の生活とスポーツ」⁽⁷⁾の結果と照らし合わせてみると、まずスポーツクラブ所属の継続性では、中学女子67.3%、高校女子34.7%、大学女子14.4%、逆にスポーツクラブ無所属の継続性では、同様に32.7%、27.8%、24.1%となる。

対象者の属性などに相違があるため、単純に数値を比較するのは危険であるが、ここ約13年間の変化という視点からみると、中学、高校、大学を通してスポーツクラブに所属している女子学生は増加し、また大学におけるスポーツクラブ所属者も増加している。逆に、中学、高校、大学を通して無所属であった女子学生は非常に減少し、同時に大学におけるスポーツクラブ無所属の女子学生も減少し、女子学生の間へのスポーツの浸透が徐々に高まってきていることがうかがえる。

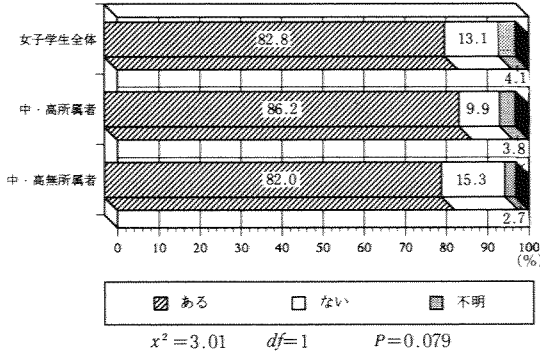
3. スポーツ観戦

前述した通り、「スポーツ参与」の概念には近代社会における人間とスポーツの関わり合いの全てが含まれるため、観衆としてスポーツの試合を

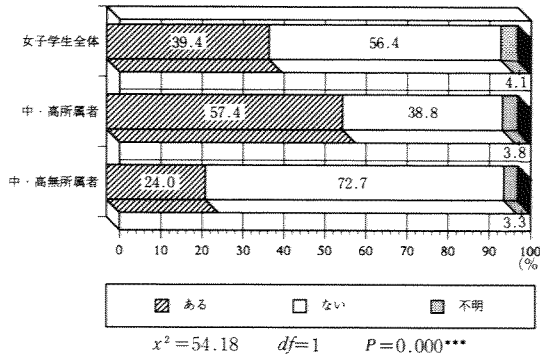
みたり、テレビ番組でスポーツの試合をみたりすることも含まれる。

図Ⅱ-2、3は「ここ1年間、テレビ(図Ⅱ-2)で、試合会場(図Ⅱ-3)で大きなスポーツの試合を観たことがあるか」を示したものである。

図Ⅱ-2 テレビでの観戦



図Ⅱ-3 試合会場での観戦



まず、テレビでスポーツの試合をみたことがあるのは女子学生全体で82.8%と高い視聴率を示している。このテレビ観戦は、所属者、無所属者とも86.2%、82.0%と高い視聴率であり、あまり差もみられず、マス・メディアを通してスポーツが学生の生活の中に浸透していることがわかる。ちなみに、1990年の調査時における観戦で視聴率の高いスポーツ種目は、バレーボール42.7%、野球39.3%、テニス26.8%の順である⁽⁸⁾。

次に、試合会場に向いて試合を観戦したことがあるのは、女子学生全体で39.4%である。大学の立地条件(関東地区の女子学生64.8%、東北地区の女子学生35.2%)にも大きく左右されるであろうが、予想以上の女子学生が試合会場でのスポ

ーツ観戦を経験している。

しかし、所属者と無所属者との比較によると、 $P=0.000***$ で有意差がみられ、所属者の57.4%が試合会場でスポーツ観戦を経験しており、無所属者の24.0%を大きく上回っている。過去におけるスポーツクラブ所属経験の有無は、スポーツの参与形態やスポーツへの興味・度合いに大きな影響を与えているといえる。テレビ観戦と同様に、試合会場でのスポーツ観戦の高いスポーツ種目は、野球33.2%、バレーボール13.7%、テニス12.9%の順である⁽⁹⁾。

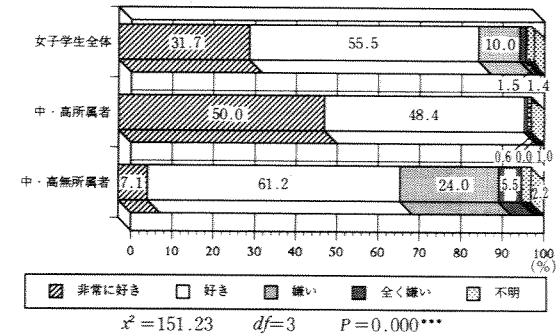
Ⅲ. 女子学生のスポーツ意識

1. 体育、スポーツについて

① スポーツの好き嫌い

「あなたはスポーツは好きですか」と尋ねると、ほとんどの人から「好きです」という回答が返ってくるのが一般的である。それではどの程度の好き嫌いがみられるのであろうか、図Ⅲ-1は「あなたはスポーツは好きか」の程度を示したものである。

図Ⅲ-1 スポーツの好き嫌い



女子学生全体では、「非常に好き」が31.7%、「好き」が55.5%、両者を合計した「好き」な女子学生は87.2% (質問に対する回答は全て4段階となっている。以下、4段階ごとの回答で表示しない限り、2段階で表示する。例えば、「好き」は「非常に好き」と「好き」の割合を合計したもの、「嫌い」は「嫌い」と「全く嫌い」の割合を合計したものを意味する)にも及ぶ。しかし、「嫌い」

な女子学生は11.5%と10人に1人の割合でスポーツ嫌いが存在する。

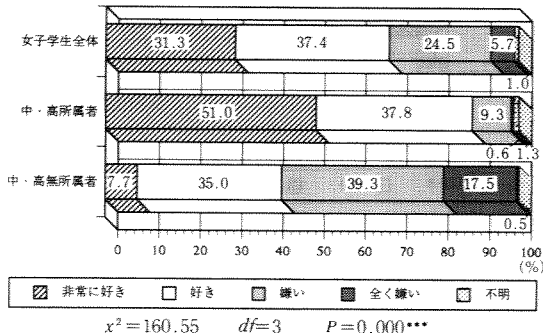
所属者と無所属者との比較によると $P=0.000^{***}$ で有意差がみられ、所属者で「好き」な女子学生は98.4%、このうち「非常に好き」は50.0%にも達する。このことは、スポーツが好き（非常に好き）だからこそスポーツクラブに中学、高校と所属してきたとも受け取ることができる。

一方、割合は減少するが無所属者で「好き」な女子学生は68.3%で3人に2人はスポーツが好きである。この好きな女子学生の中には「非常に好き」が7.1%おり、スペクテータースポーツ層の代表的な存在であったり、スポーツクラブに所属したくても、様々な条件でスポーツクラブに所属できなかった女子学生と考えられる。また「嫌い」は24.0%、「全く嫌い」は5.5%と嫌いな女子学生は29.5%にもなり、過去におけるスポーツクラブ所属経験の有無によって、スポーツの好き嫌いに大きな影響を与えていることがわかる。

② 体育の好き嫌い（小・中学校時代）

「スポーツは好きだけでも体育は嫌い」という会話をたびたび聞くことができる。それは自由なイメージを持つスポーツに対して、教育的（半強制的）イメージを持つ体育との違いによるものであると考えられるが、図Ⅲ-2は「あなたは小

図Ⅲ-2 体育の好き嫌い



さい頃（小・中学校時代）体育は好きでしたか」の程度を示したものである。

女子学生全体では68.7%が「好き」と回答し、逆に30.2%が「嫌い」と回答している。これは、スポーツの87.2%と11.5%に比べて大きく変化し

ている。スポーツ＝体育ではないが、同じく体を動かすものであるにもかかわらず、スポーツは好きだけれども体育は嫌いという女子学生が存在しているのは事実である。

所属者と無所属者の比較によると $P=0.000^{***}$ で有意差がみられる。所属者でスポーツが「嫌い」な女子学生は0.6%であったが、それが体育になると9.9%と10人に1人の割合で嫌いな女子学生が増加し、また無所属者では同様に29.5%から56.8%と増加し、半数以上の女子学生が体育嫌いとなっている。スポーツは好きだが体育は嫌いという現象は特に無所属者にその変化が顕著である。

体育が嫌いになる要因には体育の授業で嫌な思いをしたことも一因として挙げることができる。

「現在、あるいは過去の体育の授業で嫌な思いをしたことがある」女子学生は全体で67.7%と、3人に2人は嫌な思いをした経験がある。その嫌な思いの主なもの「いくら努力してもなかなかうまくならない」51.2%、「苦手な種目を無理矢理やらされた」37.4%、「授業の内容がおもしろくない」21.8%などである⁽¹⁰⁾。

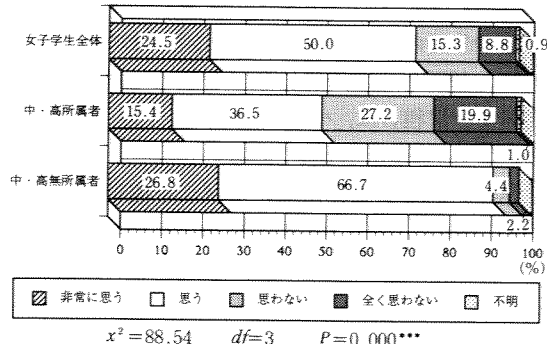
スポーツも体育も好きな人間を育てるには、スポーツのもつ「楽しさ」を体育の教材として、どのように授業の内容や指導法に反映させるかがカギとなっていると考えられる。

2. 運動、健康、体力について

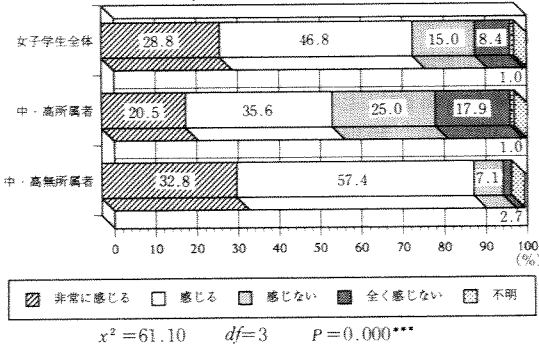
① 運動の習慣と運動不足

図Ⅲ-3は「現在、スポーツや運動をする習慣が足りないと思うか」、図Ⅲ-4は「現在、運動

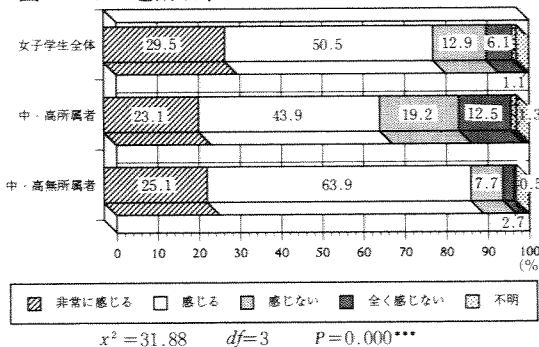
図Ⅲ-3 スポーツの習慣



図Ⅲ-4 運動不足



図Ⅲ-5 運動欲求



不足を感じるか」、図Ⅲ-5は「現在、もっと運動をしたい、しなければならないと感じるか」の程度をそれぞれ示したものである。

日常生活の中にスポーツや運動をすることを習慣化させることは一朝一夕で確立できるものではない。スポーツや運動をする習慣の不足を「思う」女子学生は全体で74.5%にも及び、中でも習慣の不足を「非常に思う」女子学生は24.5%にもなる。スポーツや運動をする習慣はスポーツ活動の継続性と深い関わりがあると考えられる。その関わりを所属者と無所属者の比較からみると、 $P = 0.000^{***}$ で有意差がみられる。

所属者でスポーツや運動をする習慣の不足を「思う」女子学生は51.9%、「思わない」女子学生は47.1%、これに対して無所属者ではそれぞれ93.5%、6.6%と両者間に顕著な差がみられる。所属者の中に、スポーツや運動をする習慣の不足を「非常に思う」女子学生が15.4%もいるが、これは大学に入学してからスポーツクラブに所属せ

ず、中学、高校と継続してきたスポーツ活動が途切れた学生と推測される。過去におけるスポーツクラブ所属経験の有無は、日常生活においてスポーツや運動をする習慣を形成していくうえにも大きな影響を与えていることがわかる。

このスポーツや運動をする習慣の不足は当然の帰結として運動不足を呼び起こすことになるであろう。図Ⅲ-3と図Ⅲ-4の数値をスポーツや運動をする習慣の不足を「思う」女子学生から、運動不足を「感じる」女子学生へ→(矢印)で示すと女子学生全体では74.5%→75.6%、所属者では51.9%→56.1%、無所属者では93.5%→90.2%となり、スポーツや運動をする習慣の不足はそのまま運動不足に結びついていることが理解できる。

それでは、スポーツや運動をする習慣の不足を思い、また運動不足を感じていながらどの程度「もっと運動をしたい、しなければならない」と感じているのであろうか。女子学生全体では「非常に感じる」29.5%、「感じる」50.5%で「感じる」女子学生は80.0%にも達する。これは、運動不足を感じる(75.6%)以上に、運動をもっとしたい、しなければならないと感じており、現代の女子学生の間にはかなり高い運動欲求が潜んでいることがうかがえる。

所属者と無所属者の比較をみると、 $P = 0.000^{***}$ で有意差がみられる。所属者は無所属者や女子学生全体に比べると運動不足(56.1%)や運動欲求(67.0%)は低い。しかし、所属者の76.6%は現在スポーツクラブに所属して積極的にスポーツ活動を行っている。つまり、スポーツや運動を行っている状態にありながら、今以上に運動をしたい、しなければならないと感じている。これは、運動不足から起こる運動欲求だけではなく、スポーツ参与の条件の一つと考えられる十分な時間や施設、費用の不足などへの不満も含まれているものと受け止めることができる。無所属者は所属者に比べ89.0%と高い運動欲求を示すが、運動不足(90.2%)を感じる割には僅かであるが運動欲求は低い。

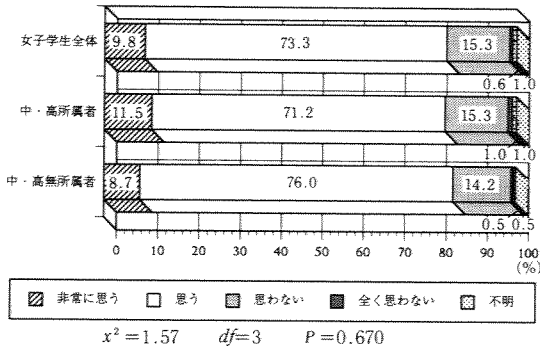
以上より、現代の女子学生は現在スポーツや運動をする習慣の不足を思い、また運動不足も感じているが、それ以上にもっと運動をしたい、しな

ければならないという高い運動欲求を持っている。この欲求は所属者より無所属者に強い。

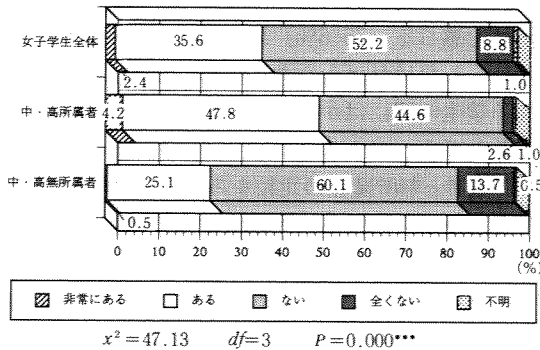
② 健康と体力

図Ⅲ-6は「現在、健康だと思いか」、図Ⅲ-7は「現在、自分の体力に自信があるか」、図Ⅲ-8は「普段、自分の健康や体力に注意を払っているか」の程度をそれぞれ示したものである。

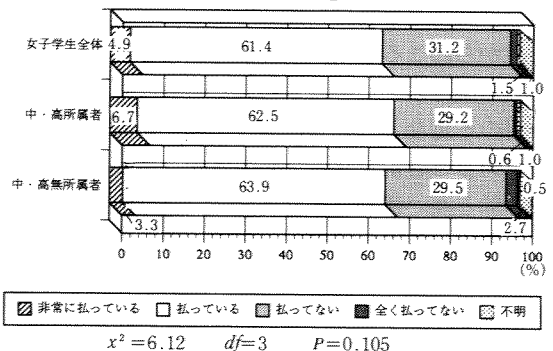
図Ⅲ-6 健康



図Ⅲ-7 体力への自信



図Ⅲ-8 健康・体力への注意



まず、健康についてみると、女子学生全体で健康であると「思う」のは83.1%である。この傾向は所属者(82.7%)、無所属者(84.7%)に関係なく8割以上の女子学生が現在健康であると思っている。総理府の調査によると、20才以上の女性で現在健康である(大いに健康とまあ健康の合計)と思っている者は84.7%(20~29才の男女の合計では91.9%)⁽¹¹⁾と同様な数値を示している。

次に、体力への自信についてみると、女子学生全体で体力に自信が「ある」のは38.0%、体力に自信が「ない」のは61.0%である。所属者と無所属者の比較をみると $P = 0.000***$ で有意差がみられ、所属者で体力に自信が「ある」のは52.0%、無所属者では25.6%と半減する。そして、無所属者で体力に自信が「ない」のは73.8%にも達し、過去におけるスポーツクラブ所属経験の有無は身体的にも精神的にも体力への自信に影響を与えているものと考えられる。

しかし、所属者の47.2%の女子学生が体力に自信が「ない」と回答している。これは、スポーツ活動の継続性が途絶え、運動不足からくる体力への自信喪失という関係によるものか、あるいは「体力」⁽¹²⁾について共通した概念把握が女子学生間にできていないためなのか、その究明が待たれるところである。

最後に、健康であると思いながらも、体力にはあまり自身がないと思っている女子学生は、健康や体力にどの程度注意を払っているのだろうか。図Ⅲ-8によると、女子学生全体では66.3%が注意を「払っている」と回答し、この傾向は所属者(62.9%)、無所属者(67.2%)に関わりなく、3人に2人の女子学生が健康や体力に注意を払っている。

先の総理府の調査によると、健康や体力に注意を払っている(常にと時々合計)20才以上の女性は78.2%と女子学生より高い割合である。これは高齢者になるに従って注意度が高まるためと考えられる(20~29才の男女の合計では63.2%)。また、20才以上の女性が体力の維持増進のために心掛けていることは、第1位が「食生活に気をつける」73.1%、次いで「睡眠や休養をよくとる」

62.2%、「規則正しい生活をする」39.9%、「運動やスポーツをする」27.5%の順である⁽¹³⁾

以上より、現代の女子学生は体力にはあまり自信がないと思いながらも、8割以上の女子学生が健康な状態にあり、また健康や体力に対して3人に2人の女子学生は注意を払っているのが現状である。

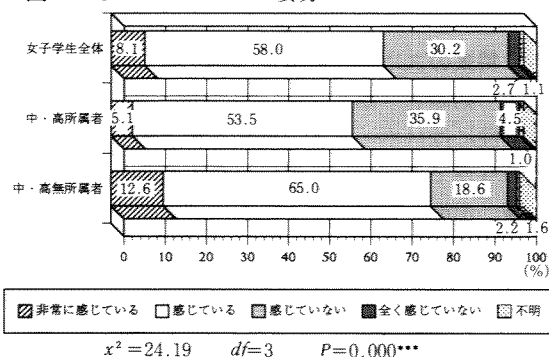
3. スポーツ参与条件について

① スポーツ意欲

スポーツ参与を成り立たせる条件には様々なものがある。社会的条件として施設、仲間、時間、指導者等、精神的条件として本人のスポーツに対する姿勢や意欲等、身体的条件として現在体を動かすことができる状態にあるか等が考えられる。

まず、精神的条件として考えられる本人のスポーツに対する姿勢であるが、図III-9は「現在ス

図III-9 スポーツへの姿勢



スポーツをするために、自分のスポーツに対する積極的な姿勢に不足を感じるか」の程度を示したものである。この積極的な姿勢とは、現在スポーツクラブに所属していて、その種目に積極的に取り組んでいる姿勢だけではなく、自ら友達を誘ってスポーツや運動をしたり、また日常生活の中に積極的にスポーツを取り入れようとする姿勢も含まれる。

その積極的な姿勢に対して、女子学生全体で不足を「感じている」のは66.1%、「感じていない」のは32.9%であり、3人に2人は積極的な姿勢に不足を感じていることになる。しかし女子学生全体の56.9%は現在スポーツクラブに所属しており、

そしてスポーツクラブ所属者の76.0%は積極的に参加しているのが実状である。

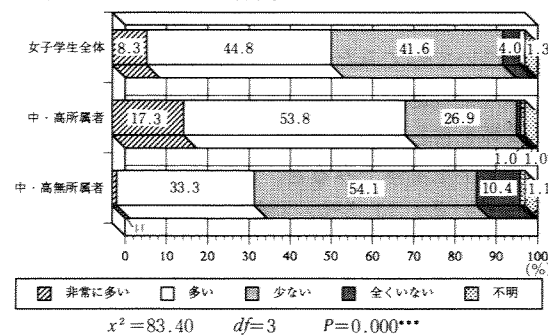
スポーツに対する積極的な姿勢とは、スポーツクラブに所属してそのスポーツに積極的に取り組んでいる姿勢のみを指すのではなく、スポーツを日常生活に積極的に組み入れていこうとする姿勢も入るものであるとするならば、この現状からして女子学生全体においてスポーツはスポーツクラブで行う以外では、日常生活に定着しているとは言いがたく、女子学生間に徐々にスポーツは浸透してきているものの、積極性の面ではまだ不足しているといえる。

所属者と無所属者の比較をみると $P=0.000^{***}$ で有意差がみられる。所属者において積極的な姿勢に不足を「感じている」女子学生は58.6%と半数以上になる。同様に、無所属者では77.6%となる。過去におけるスポーツクラブ所属経験の有無はスポーツをするための積極的な姿勢に顕著な差をもたらしているが、所属者においても現在スポーツを日常生活に取り入れ、定着させようとする姿勢となると十分な状態であるとはいえない。

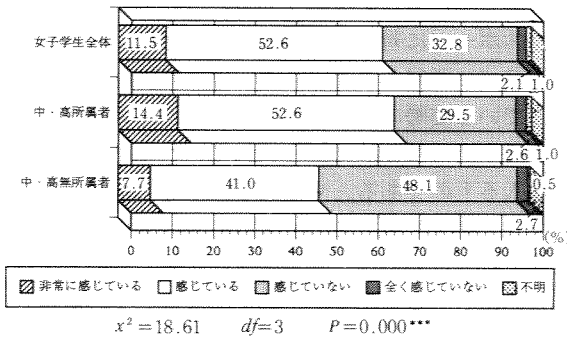
② スポーツ仲間、施設

スポーツに対する積極的な姿勢に不足を感じていても、スポーツ参与を成り立たせるきっかけとしてのスポーツ仲間、そしてそれを実現させる場としてのスポーツ施設がある。図III-10は「現在、スポーツをしようとする時スポーツ仲間は多いか」、図III-11は「現在、自由にスポーツを行うための施設に不足を感じているか」の程度をそれぞれ示したものである。

図III-10 スポーツ仲間



図III-11 スポーツ施設



まず、スポーツ仲間について女子学生全体では53.1%が「多い」と回答している。スポーツクラブに所属している女子学生が全体で56.9%という割合から推測すると、スポーツクラブの仲間はそのまますぐのスポーツ仲間であると考えられる。この傾向は、所属者、無所属者においても同様であり、所属者でスポーツ仲間が「多い」と回答した女子学生は71.7%で、現在スポーツクラブに所属しているのは76.6%、無所属者でスポーツ仲間が「多い」と回答した女子学生は34.4%で、現在スポーツクラブに所属しているのは32.8%である。

このことから、現代の女子学生のスポーツ仲間の多少は、過去におけるスポーツクラブ所属経験の有無によってその差は顕著であり、またそのスポーツ仲間は現在所属しているクラブ(運動系、文化系、その他を含む)の構成員から成っていると。今後、スポーツ仲間を増やすにはクラブに所属するなり、またクラブに所属している者はクラブ内の交流にとどまらず、クラブ間あるいはクラブを越えて新しい人間関係を創り出すことが必要であると考えられる。

次に、自由にスポーツを行うための施設の充足度についてみてみたい。この場合のスポーツ施設とは大学の施設、公共の施設、民間の営利目的の施設等を含むものである。

女子学生全体でみると、施設の不足を「非常に感じている」11.5%、「感じている」52.6%で「感じている」女子学生は64.1%にも及ぶ。これは大学が都心部にあり、土地問題などを含めて十分なスポーツ施設を保有できなかつたり、逆に地

方都市にあるため、都心部に比べて民間のスポーツ施設が少ないという大学の立地条件が原因であったり、また大学のスポーツ施設のほとんどは体育会系のスポーツクラブに占有され、施設を捜しながら練習するジブシー的同好会が存在するためにこのような高い割合になったものと考えられる。

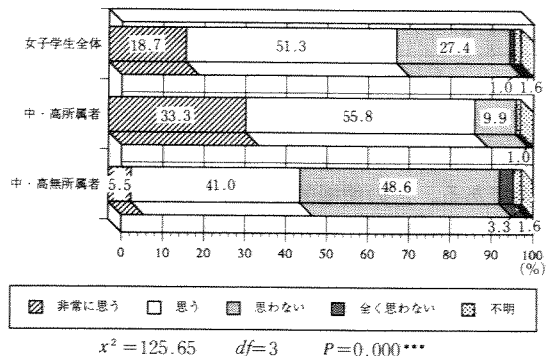
所属者と無所属者の比較をみると $P = 0.000^{***}$ で有意差がみられる。所属者でスポーツ施設の不足を「感じている」女子学生は67.0%、無所属者では48.7%である。所属者で現在スポーツクラブに所属している女子学生は76.6%であることから、スポーツクラブ所属者のほとんどがスポーツ施設の不足を感じていることになる。これは単にジブシー的同好会の存在によるだけではなく、スポーツ施設の量より質の問題として、よく整備された本格的なスポーツ施設の、また無所属者においては身近に利用できる利便性に富んだスポーツ施設の不足を感じているのではないかと考えられる。

4. 将来のスポーツ参与について

① 結婚とスポーツ

女性にはスポーツや運動から遠ざかる機会が生涯のうちで3回訪れるといわれる。それは就職、結婚、出産・育児の時である。図III-12は「結婚

図III-12 結婚後のスポーツへの姿勢



してもスポーツを積極的に行っていくと思うか」の程度を示したものである。結婚後のスポーツに対する積極性において、女子学生全体では70.0%が積極的に行っていくと「思う」と回答しており、現代の女子学生にとって結婚はスポーツに限らず、女性が将来様々な活動を起こす場合にさほど大き

な障害になるとはいえないようになってきているようである。しかし、「将来、女性がスポーツ活動をする時、夫や家庭の協力や理解が必要だと思うか」に対して、女子学生全体で「非常に思う」28.6%、「思う」63.9%で、92.5%⁽¹⁴⁾の女子学生が夫や家庭の協力や理解の必要性を思っている。

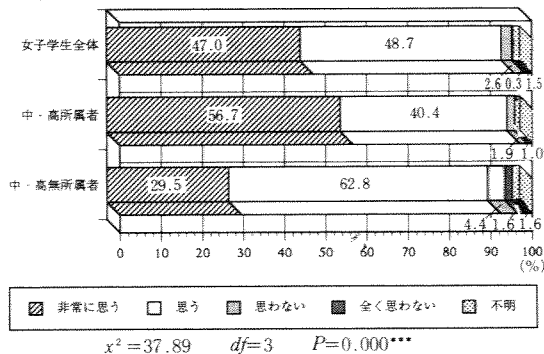
所属者と無所属者においては $P=0.000^{***}$ の有意差をもって相違がみられ、所属者において約9割の女子学生が結婚後もスポーツを積極的に行っていきたいとし、3人に1人は「非常に思う」と回答している。これに対して無所属者では半数以上の51.9%が積極的に行っていきたいとは「思わない」と回答し、過去におけるスポーツクラブ所属経験の有無は将来のスポーツ参与への予測にも大きな影響を与えている。

参考までに「将来、女性がスポーツ活動をする時、出産や育児は防げになると思うか」に対して女子学生全体では38.2%が「思う」、60.0%が「思わない」と回答している⁽¹⁵⁾。

② 子供のスポーツ参与

子供のスポーツに対する姿勢や興味は親の影響を多分に受けるといえる⁽¹⁶⁾。図III-13は「将来、

図III-13 子供のスポーツへの姿勢



あなたに子供が生まれたら、その子供にスポーツを勧めようと思うか」の程度を示したものである。女子学生全体では「非常に思う」47.0%、「思う」48.7%で女子学生の95.7%は子供にスポーツを勧めようと思っている。大部分の女子学生は子供のスポーツ参与に好意的な姿勢を示すと同時に、スポーツの持つ社会的、精神的、体力的側面のメリ

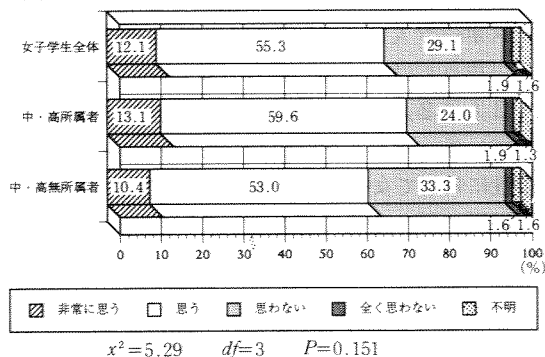
ットを感じているようにもうかがえる。

所属者と無所属者の比較をみると $P=0.000^{***}$ で有意差がみられる。両者とも9割以上が子供のスポーツ参与に理解を示しているが、特に無所属者の29.5%に比べ、所属者の56.7%が子供にスポーツを勧めることを「非常に思う」と回答し、過去におけるスポーツクラブ所属経験の有無は子供のスポーツ参与に対する姿勢にも顕著な差としてみられる。

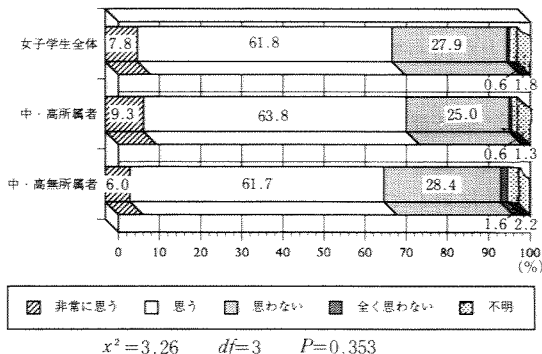
③ 10年後の余暇とスポーツ

週休2日制の普及、拡大、学校5日制の導入などともなって余暇時間が増大してくる日本において、女子学生は10年後の余暇やスポーツをどのようにみているのであろうか。図III-14は「日本の10年後には、今まで以上に人々の余暇は増えていると思うか」、図III-15は「日本の10年後には、今まで以上にスポーツを行う人々は増えていると

図III-14 10年後の余暇

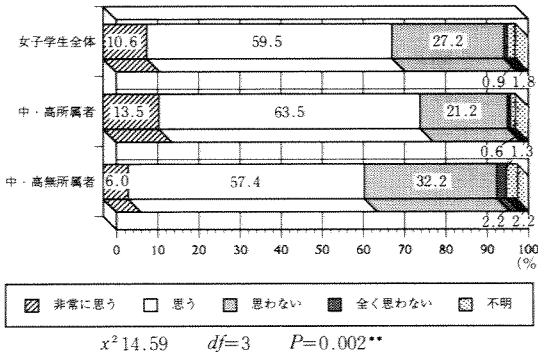


図III-15 10年後のスポーツ人口



思うか」、図Ⅲ-16は「日本の10年後には、今まで以上にスポーツは生活の中で重要な位置を占めると思うか」の程度をそれぞれ示したものである。

図Ⅲ-16 10年後のスポーツの重要性



以下、女子学生全体の傾向と所属者、無所属者の間で顕著な差がみられるものを取り挙げて一括して考察を行う。

まず、余暇増に対して女子学生全体でそう「思う」は67.4%，そう「思わない」は31.0%で3人に2人は将来の余暇時間の増加を思っている。またスポーツ人口の増加に対して女子学生全体でそう「思う」は69.6%，そう「思わない」は28.5%で3人に2人強は将来のスポーツ人口の増加を思っている。そして生活の中におけるスポーツの重要性に対して女子学生全体で重要になると「思う」のは70.1%，そう「思わない」は28.1%で7割が生活の中でスポーツが重要な位置を占めるようになると思っている。

つまり、女子学生全体では「10年後の日本では余暇時間は増加し、同時にスポーツを行う人々も増え、今日以上にスポーツは生活の中で重要な位置を占めるようになる」という考えを3人に2人以上が持っている。

この傾向は所属者、無所属者に関係なくみられ、特に無所属者に比べ所属者に強くみられる。しかし無所属者は余暇増や生活の中でのスポーツの重要性に対して前者で34.9%，後方で34.4%がそう「思わない」と回答しており、3人に1人は否定的な立場にある。

むすび

「スポーツクラブ所属経験の有無からみた女子学生のスポーツ参与の相違」の考察から現代の女子学生のスポーツ参与が明らかになったのと同時に、過去（中学、高校）のスポーツクラブ経験の有無により、所属者と無所属者の現在あるいは将来のスポーツ参与に顕著な差がみられた。

考察から得られた女子学生のスポーツ参与の諸結果を箇条書的にまとめると以下の通りである。

- ① 女子学生の自由裁量時間は「2～3時間」が一番多く、次いで「4時間以上」となる。この自由裁量時間の主な過ごし方は所属者、無所属者ともウィークデーでは「友達付き合い」、「テレビ、なんとなく」であるが、特に無所属者に文化・教養型の過ごし方の傾向が強くみられる。ウィークエンドで所属者は「ショッピング」、「運動、スポーツ」と行動型であり、無所属者は「音楽、映画観賞」と文化・教養型と分かれる傾向にある。(P=0.000***)
- ② 日常におけるスポーツ活動は無所属者に比べ所属者に多くみられ、特にウィークエンドにおける自由裁量時間の主な過ごし方で「運動、スポーツ」は3番目に現われてくる。(P=0.000***)
- ③ 大学における所属者、無所属者のスポーツクラブ所属率では、無所属者の32.8%に比べ所属者は76.6%と2倍以上の所属で、過去におけるスポーツクラブ所属経験はそのまま大学におけるスポーツクラブ所属率の差として現われてくる。(P=0.000***)
- ④ スポーツ観戦において、テレビによる観戦は所属者、無所属者とも8割以上であるが、試合会場に向いての観戦では所属者57.4%，無所属者24.0%で、その差が顕著となる。(P=0.000***)
- ⑤ スポーツの好き嫌いにおいて所属者の98.4%，無所属者の68.3%はスポーツが好きである。(P=0.000***)しかし、小、中学校時代の体育の好き嫌いになると所属者の9.9%，無所属者の56.8%が嫌いで、特に無所属者の変化が顕著である。(P=0.000***)

- ⑥ 現代の女子学生は現在スポーツや運動をする習慣の不足を思い、また運動不足も感じているが、それ以上にもっと運動をしたい、しなければならないという高い運動欲求を持っている。この欲求は所属者より無所属者に強い。(3項目とも $P=0.000^{***}$)
- ⑦ 所属者、無所属者に関係なく8割以上の女子学生は現在健康であると感じているが、体力への自信においては所属者の52.0%が自信を持っているのに対して、無所属者の73.7%が体力に自信がないとしている。また、健康や体力への注意度は所属者、無所属者に関係なく3人に2人強の女子学生が注意を払っている。(体力への自信のみ $P=0.000^{***}$)
- ⑧ スポーツをするための積極的な姿勢に対して、所属者の58.6%、無所属者の77.6%が不足を感じている。スポーツクラブに所属して積極的に活動していても、それ以外の日常生活におけるスポーツ活動となるとその姿勢は消極的であり、スポーツの定着化までには至っていないのが現状である。($P=0.000^{***}$)
- ⑨ スポーツ仲間の多少は過去におけるスポーツクラブ所属経験の有無によってその差は顕著であるが、そのスポーツ仲間は現在所属しているクラブの構成員から成っている。($P=0.000^{***}$)
スポーツ施設に対して所属者の67.0%、無所属者の48.7%は不足を感じているが、所属者は量より質の問題として本格的な施設の、無所属者は身近で利用できる利便性に富んだスポーツ施設の不足を感じている。($P=0.000^{***}$)
- ⑩ 結婚後のスポーツに対する姿勢において、所属者の89.1%、無所属者の46.5%は結婚後もスポーツを積極的に行っていきたいと思っているが、両者間には顕著な差がみられる。($P=0.000^{***}$)
子供のスポーツ参与に対して両者とも9割以上が子供にスポーツを勧めようと思っているが、所属者の「非常に思う」は56.7%で無所属者の29.5%に比べ非常に高い。($P=0.000^{***}$)
- ⑪ 所属者、無所属者に関わりなく、10年後の日本では余暇は増加し、同時にスポーツ人口も増加し、今日以上に生活の中でスポーツは重要な

位置を占めるようになるという考えを3人に2人強は持っている。特に所属者にその意識が高い。(スポーツの重要性のみ $P=0.002^{**}$)

1993年5月15日Jリーグ(日本プロフェッショナル・フットボール・リーグ)が開幕し、また若貴の活躍により大相撲が若者、特に女性の間で人気を沸騰しテレビによるスポーツ観戦者も一段と増加し、日本のスポーツ界は大きく様変わりしたといえる。

「我が国のスポーツに関する調査」⁽¹⁷⁾によると、観戦率の高いスポーツ(一般、複数回答)は「大相撲」48.2%、「プロ野球」40.9%、「マラソン」19.7%、「高校、大学野球」14.9%、「バレーボール」、「ゴルフ」13.0%の順である。今年度の調査結果が待たれるところであるが、この順番に「サッカー」がどこまで入り込んでくるかが楽しみである。

注

- (1) 江刺正吾 『学生の生活とスポーツ』 道和本書院 1980年 p.1
- (2) 同上 pp.89-90
- (3) NHK世論調査部編 『図説 日本人の生活時間 1990』日本放送出版協会 1992年
- (4) 同上
- (5) 対象者である女子学生全体(941名)の中には表-1の通り「体育専門の学生」が161名(17.1%)含まれているため、幾分スポーツクラブ所属者の割合が高くなっているものと考えられる。ここで、「体育専門の学生」が全て「学校の運動部」に所属していると仮定して、全体の941名から除外して計算すると母数は780名となる。従って、現在スポーツクラブに所属している女子学生は(535名-161名)374名で47.9%、所属していない学生は50.4%となる。
- (6) 新谷崇一「女性の生涯スポーツに関する調査-高校生、短大生、大学生を対象として-」『福島大学地域研究』第2巻第3号 福島大学地域研究センター 1991年 p.56 表II-17-①参照
- (7) 江刺・前掲書 (1) pp.73-76

- (8) 新谷・前掲報告 (6) p. 61 表Ⅱ-22-②参照
- (9) 同上 p. 62 表Ⅱ-23-①参照
- (10) 同上 p. 63 表Ⅱ-24-②参照
- (11) 総理府広報室 『体力・スポーツに関する世論調査』 1991年10月調査
- (12) 体力とは個人の持つ身体能力であり、形態や走る、跳ぶ、投げるといった運動の基礎となる能力だけでなく、精神的な要素もその概念に含まれる。この身体能力は体力診断テストによって測定でき、個人の身体能力はランク付けできる。体力診断テストの結果、平均以下であるから体力には自信がない、平均以下でも日常生活において何ら不都合を感じないため体力には自信があるという受け止め方ができるため、体力に対する質問の回答は信頼性に乏しいともいえる。
- (13) NHK世論調査部編 前掲書 (3)
- (14) 新谷・前掲報告 p. 72 表Ⅲ-59参照
- (15) 同上 p. 72 表Ⅲ-60参照
- (16) 新谷崇一 「女性の生涯スポーツの形成過程における家族の影響—女子大学生のスポーツ意識及びスポーツ活動より—」 『行政社会論集』 第5巻第3号 福島大学行政社会学会 1993年 pp. 16-43
- (17) 三和総合研究所『我が国のスポーツに関する調査—調査報告書—』1992年3月